

オーディオ実験室収載

iPhono 導入記(6) —アナログからのリアルタイム DSD 変換再生—

1. はじめに

前報(5)までにカートリッジの負荷インピーダンスや盤のイコライザーカーブの選択の目途が付きましたので、iPhono の出力を DA-3000 に入力し、リアルタイムに DSD 変換して聴いてみることにしました。

2. アナログのリアルタイム DSD 変換再生の方法

次のルートで iPhono の出力を DA-3000 に入力し、リアルタイムに 5.6MHzDSF のフォーマットに変換して試聴します。

iPhono → DA-3000(44.1KHz) → MYTEK DIGITAL 192-DSD(DA-3000 より
クロック入力)

ここで DA-3000 には ABS-7777 からクロック入力を行います。

カートリッジは EMT XSD-15 と Ortofon SPU Synergy を使用し、負荷インピーダンスの調整や盤に対するイコライザーカーブの選択は前報までの結果から設定します。使用する盤は前報(5)までに使用したものからいくつか選抜して聴いてみました。このようなリアルタイム DSD 変換再生に対し、iPhono 出力をそのまま聴く場合を比較します。

また、リアルタイムに 192KHz24bitWAV のフォーマットに変換して聴く場合とも比較します。この場合、DA-3000 には GPS-777 から 192KHz のクロックを入力し、DA-3000 のアナログ出力で比較します。

3. アナログのリアルタイム DSD 変換再生結果

iPhono の出力を DA-3000 に入力し、リアルタイムに 5.6MHzDSF のフォーマットに変換して聴いてみると、iPhono 出力をそのままプリアンプに入力して聴く場合に比べて、鮮度感は若干低下しますが、楽器の音色や音調に大きな変化はありません。一方、192KHz24bitWAV のフォーマットに変換した場合では、5.6MHzDSF のフォーマットに変換した場合に比べて、iPhono 出力をそのまま聴く場合から少し自然さが失われ、もともとはアナログソースであるのに 192KHzPCM で聴いていますので若干 CD を聴いているような印象を持ちます。

4. まとめ

iPhono 出力をそのままプリアンプに入力する場合がもっとも鮮度感があり、ついで

5.6MHzDSF のフォーマットに変換する場合は鮮度感は低下するものの、音色や音調に違和感がありませんが、192KHzPCM にしてしまうと元のアナログからは少し離れた音になってしまいました。

以上のようなフォノイコ出力をわざわざ DSD に変換して聴く意味はないのですが、PCM との差を聴き比べ、どちらが元のアナログの音色や音調に近いかを見るために実施したわけです。この結果から DSD の方はアナログに近いという一般的の認識を確かめることができたと言っていいと思います。

以上